

## は じ め に

—なぜ書くか、なぜ研究するか、を問う—

校長 西牟田哲哉

令和5年度は、コロナ禍から様々な活動が復活し、その「復活のあり様」が問われた年でした。本校の伝統的研究大会である「高校教育シンポジウム」もコロナ禍前の形でほぼ復活しました。と同時に、第3分科会で「探究活動」をメインにした発表を企画するなど、新たな取り組みも少しずつ加わっています。本研究紀要51号は、こうした背景の中で編集されました。

私が思うに、「教育」という営みは、本来、実践そのものであります。それをあえて「研究」して書く、文章化するという行為は、本来的に何のためでしょうか？ どういう意味を持つのでしょうか？「教育」の激しい変動期に、私達は学校という場所で、今仕事をしています。時流の中で立ち止まり、根源的な問いについて、あえて対象化・意識化して考えるのも、よいことなのではあるまいか、と考えました。

不肖私も今回は、この「はじめに」以外に2つの文章を書きました。「書く行為」—それは、もしかしたら私にとって、実践そのものなのかもしれない。なぜ、書くのか。自問自答しつつ、拙稿を仕上げました。

ここに掲載された20本弱の論考。それぞれその背景は、様々であります。関心ある所からご自由にご一読いただき、紀要の形で文章にすることの意味や意義をどう捉えるか、ご講評を拝聴しつつ、読者の皆様と共に考えていきたいと思ひます。

